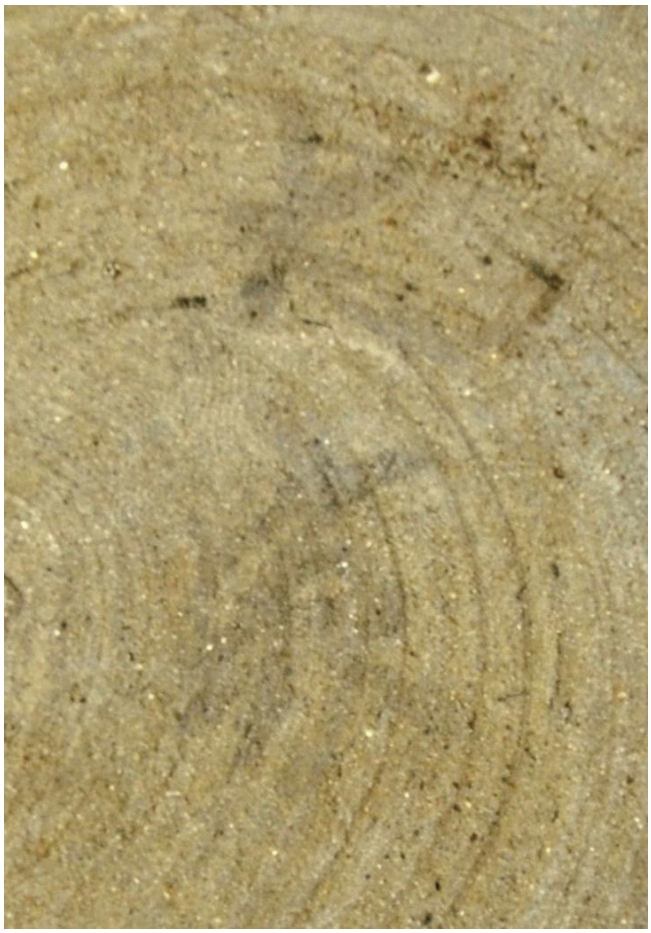
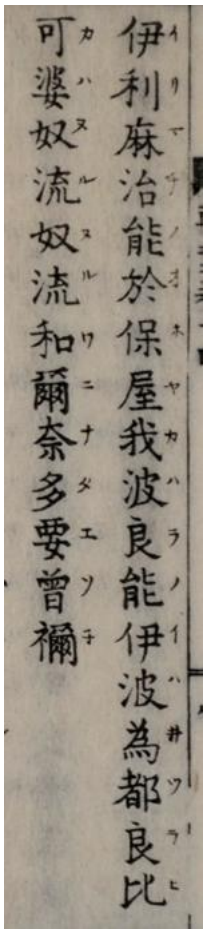
川越市立博物館

博物館だより

第75号



「大家」墨書土器　（奈良時代　弁天南遺跡）



伊利麻治能於保屋我波良能伊波為都良比
可婆奴流奴流和爾奈多要曽禰

［口語訳］
入間道の大家が原のイワイツラが、
引いたらずるずると抜けるように
するすると従順に付いてきて私と絶えないでくれ

『万葉集』巻14－3378　東歌

「大家」墨書土器から川越の古代史を考える

－入間川を挟む二つの地域のつながり－

はじめに

「大家(おおや)さん」という言葉には、人と人との「つながり」を思い起こさせる懐かしい響きがあります。

「大家」と墨で書かれた上の写真は、川越市仙波町3丁目の弁天南遺跡で見つかった、今から1200年余り前の奈良時代の土器です。この時代の大家は私たちが懐かしむ大家とはだいぶ異なり、そもそも「家」という字は公的な施設を表す場合に使用された文字でした。古代の郡の役所を「郡家(ぐうけ)」と記すのはよい例です。

1．律令国家の始まり

今から約1300年前、日本は中国を手本に、法律で国を治める国家づくりを進めていました。

中央の都には政府が置かれ、地方は国・郡・里(後に郷)に分けられました。そして国には国府(こくふ)、郡には郡家(ぐうけ)、里には里家(郷家)(りけ(ごうけ))といった役所が置かれました。

川越市は、当時、入間郡に属していました。平安時代中頃、入間郡には麻羽郷(あさばごう)、大家郷(おおやけごう)、郡家郷(ぐうけごう)、高階郷(たかしなごう)、安刀郷(あとごう)、山田郷(やまだごう)、広瀬郷(ひろせごう)、余部郷(あまるべごう)の八つの郷があったことがわかっています。

そうです。写真の「大家」とは入間郡大家郷を意味していると考えられます。

古代入間郡の八つの郷が、現在のどこにあたるのか。郡家が置かれた郡家郷は、入間川左岸の川越市霞ヶ関遺跡周辺でほぼ間違いないようですが、その他の郷の所在地については諸説あり、未だ定説がありません。ところが、川越市弁天南遺跡で「大家」墨書土器が発見されたことで、仙波台地とその周辺が大家郷の有力候補地として名乗りを上げました。

2．入間郡の中心の郷

郡という行政区画は大領(長官)・少領(次官)になりうる二つの豪族の支配領域を前提に設けられたといわれます。

さて、入間郡では、郡の長官にあたる大領が支配していた地域はどこだったのでしょうか。

郷の名が示す通り、郡の中心となる役所・郡家が置かれた「郡家郷」が、まず第一に考えられます。ところが入間郡の場合、どうもそうとは言い切れないようです。

全国の郡家の所在地と郷名の関係を調べ、その規則性を見出した平川南さんによれば、郡家が置かれた郷は、「郡家郷」と「郡名を冠する郷」、そしてもう一つが「大家郷」とのことです。

つまり、入間郡は、郡家が置かれるにふさわしい名を持つ郷が二つあるということになります。

このことから平川さんは、入間郡の場合、当初郡家は大家郷に置かれ、後に大家郷を割いて郡家郷が設置され、郡家が移動したのだろうと考えました。

仙波台地における最近の発掘調査の成果は、平川さんの説を裏付けるような資料がたくさん見つかってきています。

3．仙波台地の古代の豊かさ

仙波台地上の古代の遺跡は、大和朝廷から下賜されたと考えられる銅鏡(埼玉県内で唯一4世紀代の鏡)を副葬する三変稲荷神社古墳が築造された4世紀後葉から始まります。その後5世紀代に一時衰退期がありますが、6世紀には市内最大級の古墳が造られるまでに回復し、7世紀以降の興隆へとつながります。

この時代の遺跡が、一般的な集落なのか、国や郡の役所などの官衙遺跡なのかを見極める出土品に、畿内系土師器があります。これは畿内及び周辺で作られた土器で、入間川左岸の入間郡家跡とされる霞ヶ関遺跡でも見つかっていますが、それよりも一段階古い時期のものが仙波台地上の弁天西遺跡では出土しています。

図１　和同開珎(奈良時代　弁天西遺跡)

図２　銅製のおもり　90ｇ(奈良時代　弁天西遺跡)

和同開珎(図１)は、秩父で和銅(自然銅)が発見されたのを記念し発行されたとされる、日本最初の本格的貨幣です。発行の本当の理由は、平城京造営のために破綻しかけた朝廷の財源確保にあったと考えられています。一日の労働に対して一文が支払われました。そのためもあって、都では流通しましたが地方には広まらず、呪いの道具等で使用されていました。埼玉県内の出土は、弁天西遺跡を含め6例だけです。

ちなみに「厄を祓う」と言いますが、それは「お金を払う」の「はらう」と同根の意味を持ちます。

仙波台地上で特に注目される遺物は、弁天西遺跡で発見された銅製の錘(図２)です。中央集権国家にとって度量衡を統一することは、収税や土木工事を円滑に進めていくうえで必須の要件です。その基準を定め管理

することが役所の重要な仕事でした。錘の場合、その基準となる原器は銅で作られ、中央政府は随時その原器を各国の役所に配布しました。原器の重量は、各地で鉄や焼物、石を使ってコピーされました。

つまり、中央政府から配布された銅製の錘は、役所などの特別な場所で保管管理されるべきものであったことから、それを出土した弁天西遺跡の性格は、自ずとうかがい知ることができます。なお、旧武蔵国内で銅製の錘が見つかっているのは、弁天西遺跡と武蔵国府跡だけです。

4．仙波台地の古墳と寺院

関越自動車道・川越インター北側にポツリと残る林の中に、日本最大級の上円下方墳、山王塚古墳があります。四角い基壇の上にお椀を伏せたような形の上円下方墳と呼ばれる終末期古墳は、全国で10例程度しか確認されていません。築造時期はおそらく7世紀代で、律令国家の胎動期、入間川右岸の仙波台地の続きに、有力な豪族がいたことを今に伝えています。山王塚古墳内部は未調査のため、どんな副葬品が眠っているのかは将来の楽しみですが、すぐ隣で調査された山王塚西古墳からは、貴重な副葬品が多く見つかっております。その中で特に注目されるのが瑪瑙製と水晶製の勾玉です(図3)。この時代の瑪瑙や水晶の勾玉は出雲国の忌部神戸(現・島根県松江市)で独占的に製作されていました。

日本への仏教の公式伝来は538年とされます。当初、この異国の宗教を受け入れるかどうかで朝廷内部で対立がありましたが、徐々にその信仰は全国に広まり、武蔵国内でも7世紀前半に寺谷廃寺(滑川町)が創建されてからは、有力豪族が寺院を造営するようになりました。

ところで川越市内は、これまで古代寺院跡の空白地帯とされてきました。しかしそれも最近の発掘調査で大きく塗り替えられようとしています。

川越街道が川越台地に上がる坂は烏頭坂と呼ばれますが、古くから境界的な場所として意識されていた場所です。その辺りから城南中学校の南斜面にかけて、飛鳥時代から奈良時代初期に造られた横穴墓という家族墓がたくさん見つかっています。その岸町横穴墓群のすぐ上の台地上では、白鳳時代頃の寺院の瓦が発見されており、古代寺院の存在が想定されます。さらに、そこから約2㎞南東の新河岸川の近くでは、武蔵国分寺で葺かれたのと同じ瓦(図4)が見つかっており、国分寺瓦を葺くことを許された古代寺院(寺尾廃寺)が存在したようです。

以上のことから、入間川右岸の仙波台地及びその周辺は飛鳥時代には有力な豪族が支配する地域であったことがわかってきました。

図3　山王塚西古墳出土勾玉(飛鳥時代)

図4　寺尾廃寺の瓦(奈良時代　個人蔵)

5．『万葉集』の中の大家郷

日本最古の和歌集『万葉集』に大家郷を示す東歌が載せられています。

入間道の　大家が原のいはねつら　引かばぬるぬる
我に絶えそね

入間道の大家が原のイワイツラ※が、引いたらずるずると抜けるように　するすると従順に付いてきて私と絶えないでくれ。※イワイツラ：蔓科の植物。現存種不明。

という歌です。「入間道」は古代の駅路「東山道」の枝道の、いわゆる「東山道武蔵路」と考えられています。ちなみに古代の駅路とは、緊急時の情報伝達に利用された官道で、巾12mの直線を強く指向した道路でした。

この東歌で「東山道武蔵路」を「入間道」としているのは、「入間郡に至る道」という意味で使用しているためとされます。「入間道」こと「東山道武蔵路」から入間郡の中心、郡家所在地の霞ヶ関遺跡まで、わずかに１㎞余りと近く、「入間道の大家が原」とは、入間郡家の近くに広

がっていたであろう「大家が原」と考えられます。

つまり、入間郡家の置かれた郡家郷の中に、かつてその地域が「大家」と呼ばれる地域に含まれていたことを示す「大家が原」があったことになります。それは、古代入間郡の郡家郷は大家郷を割いて設置されたと考える平川南さんの説を裏付けることになります。

6．大家郷の豪族

では、大家郷を本拠地とし、その一部を割いて郡家郷を設置してその長官の地位についたのは誰だったのでしょうか。

それを知る手掛かりは、入間郡家の西北に祀られていた「出雲伊波比神」にありそうです。

ここで武蔵の古代史に詳しい森田悌さんの説に学びながら考えてみましょう。

森田悌さんによれば、あの有名な辛亥銘鉄剣を副葬した稲荷山古墳から始まるさきたま古墳群に葬られたのは、武蔵国造の地位にあった笠原直家だそうです。国造とは、大和朝廷から任命された地方官で、地元の有力豪族から選ばれ世襲を基本としていました。

6世紀前半、武蔵国造職を巡り笠原直使主と同族小杵の間で争いがおこりました。小杵が隣国の上毛野君小熊の援助を得て使主を殺そうとしたので、使主は朝廷に助けを求め小杵を殺して武蔵国造に着きました。その際朝廷から派遣されたのが物部連尾輿で、笠原直使主は氏名を物部に改称し、物部連の後ろ盾を得て武蔵国造として武蔵地域の支配に臨んだであろうと森田さんは考えます。

6世紀後半になり、蘇我氏との対立で物部氏が滅亡すると、その後ろ盾を失った武蔵国の物部直の本宗家も衰退してしまいます。ところが武蔵国造は比企郡や入間郡を拠点としていた物部直の庶流に引き継がれたようです。森田さんは、その流れの一人が、都に出て聖徳太子の舎人となり、後に武蔵に帰り国造となった物部直兄麻呂で、8世紀中頃に恵美押勝の乱の鎮圧に活躍し入間宿禰を賜わった物部直広成が、兄麻呂の流れを汲む入間郡の豪族であろう考えました。

『古事記』『日本書紀』や『先代旧事本紀』によれば、出雲系の神の「天穂日命」を祖神とするのが、出雲国造と土師連、そして武蔵国造なのです。

ここまでくればお判りのように、今から1300年余り前、入間郡大領として入間川左岸の霞ヶ関に郡家を造営し、その西北に出雲伊波比神を祀ったのは、出雲系の神を祖神とする「物部直家」であったと推定できます。そして物部直家の本来の本拠地は、入間川右岸の仙波台地とその周辺にあったと考えることができます(註1)。

最後に

博物館だより73号で、太田道灌の頃から繁栄が始まる仙波台地北端の川越城とその周辺は、入間川左岸の霞ヶ関地域にあった伝統的な勢力の歴史と文化を引き継ぐように生まれたと述べました。ところが、その入間川左岸の霞ヶ関の地域も、古代においては右岸の仙波台地とその周辺と一体をなし「大家」と呼ばれ、物部氏が治める地域であったことが考えられます。

このように、長い年月を経て今なお受け継がれている「つながりの歴史」に気付いてみると、私たちはこれからも、この結びつきを大切にしていかなければならないと強く感じます。

（田中　信）

【註】

(1) 中世になると入間郡は、東の「入東郡」と西の「入西郡」とに分かれます。実はこの中世に表面化する郡の分割の端緒は古代にあると考えています。その根拠は、古代入間郡の東部を物部直が、西部を大伴部直がそれぞれ支配領域としていたという想定が成り立つからです。そこで問題になるのが支配の境界の線引きです。一つは本文中で前提とした小畔川境界説、もう一つが入間川と小畔川に挟まれた地域を緩衝地帯として境界線とする説です。後者の場合、平川南さんが説く大家郷を割くという仕方として、人を割いて緩衝地帯に移住させ郡家郷を設けたというあり方も想定できます。発掘調査の成果は後者を支持しているように思えます。

【主な参考文献】

森田悌『武蔵の古代史　国造・郡司と渡来人・祭祀と宗教』2013　さきたま出版会
平川南「古代の郡家と里・郷」『歴史民俗博物館研究報告書』178　2013

古書画［軸物］の取扱いについて

古書画と一口にいっても、その形態は多様です。程度の差こそあれ、不用意に扱えば更に損傷を加えてしまいそうな状態にあることが多く、たまたま家のどこかに発見の機会を得ても、つい敬遠して再度棚上げしてしまうことが多いのではないでしょうか。

古書画のうち、比較的目にする機会が多いにもかかわらず、何となく扱いづらい厄介もののように思われているのが軸物でしょう。

今日は、多くの方からご要望が多いと伺いましたので、軸物の扱い方を掻い摘んで解説させていただきたいと思います。軸物の扱いは、要領さえ呑み込めば、さほど厄介ではありません。

まず、軸物が収まっている桐箱を開けます。このように蓋を閉めた状態で箱と蓋に段差がないものを箱といいます。蓋の内側には箱本体の板の半分ぐらいの厚さの立ち上がり部分があって、ここに蓋を被せる形になっています。蓋を開ける際、長手方向の一方のみを強く開けると、蓋や箱本体を傷めてしまうので、水平を保つ意識で少しずつ蓋を上げていきます。

蓋を開けた状態。正しく収納されているか否か、よく観察します。

作品を取り出します。短冊形の紙片または布きれが入っていれば、これをつまんで水平に持ち上げ、一方の手を軸の下に添えて受けます。ここでも、軸端(じくばな)(軸の両端部分)の緩みや懸緒(かけお)(軸物を吊るす紐)のほつれ、懸緒を通す環の釘の緩み等々よく観察します。

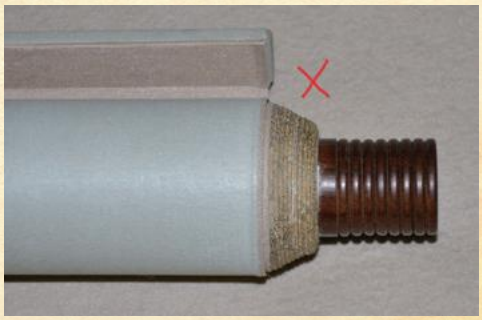
軸に巻きつけてある紐(巻緒(まきお))を解いていきます。片手で軸を保持し、軸を回すことなく巻緒を巻いてある反対方向に戻していきます。解いた巻緒は、本紙(作品部分)を見せる側に向け下手(しもて)となる側(床の間なら向かって右、展示室なら導線上の下手となる側)へ寄せておきます。

上端部分を巻き戻して、風帯(ふうたい)(掛軸の上端から下げる二条の帯状の布)がある場合は、畳んだ状態からまっすぐに下がるように戻します。

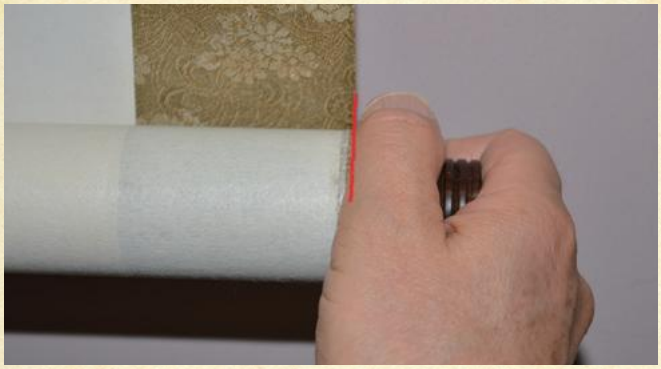
軸物を懸ける器具(自在、ピクチャーハンガーなど)に作品を懸けていきます。軸を懸ける場所が手の届く高さであれば手で、届かない場合は矢筈(やはず)(細竹などの先に叉を取り付けた道具)を使って懸けます。

懸緒を鉤(かぎ)部分に懸け、矢筈を離した手を添え、両手で軸端を支えながらゆっくりと下していきます。下まで下し切ったら、軸の傾きを点検し、矢筈を使って懸緒の三角形の頂点が真ん中になるよう調節します。これで、懸ける動作が無事終了しました。

今度は、巻き戻して収納です。軸端を両手に持ち、左右同じ速さで巻いていきます。一方が速すぎたり、力が均等にかかっていないと、いわゆるタケノコの状態になってしまいます。これでは、表具のみならず本紙も傷めかねません。



では、これを避けるにはどうするか。下の写真のように両手の親指を巻き進める方向に一直線に伸ばして表具の縁にやさしく添え、これを導きにして両手の人差指以下の指を使って転がすように回していきます。軸を強く引っ張ると、懸緒が切れたり、懸緒を支持する環が外れるおそれがあるので要注意です。



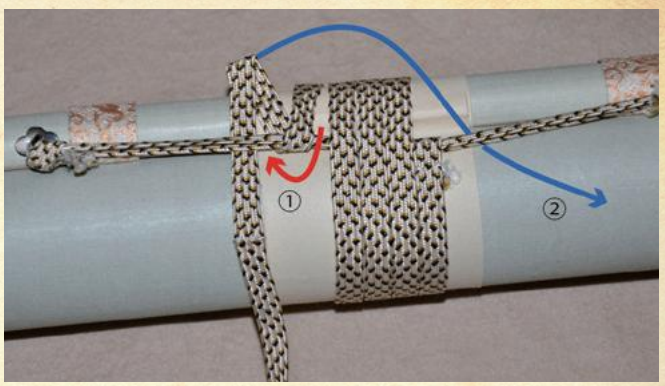
そうして、ゆるからずきつからずの気持ちで、上の一文字(本紙と他の表具部分の境界に配置された化粧裂(ぎれ)の部分)あたりまで巻き上げ、一方の手を軸の中ほどにずらして受けるように支え、空いた手に矢筈を取って懸けた時と逆の動作で鉤から外します。

用済みの矢筈は、安全な場所に静かに置きます。

残りの部分を巻いて、風帯をもとのように畳んで納めます。風帯は、表具に向かって左が下になるように畳むのが本式だそうです。ときどき風帯を下げたまま巻き込んでしまった軸物に出くわしますが、軸を懸けた時ゼンマイばねのように跳ねて見苦しいばかりでなく、保存上も好ましくないので、不可です。

軸がきれいに巻けたら、巻緒を巻き戻していきます。巻紙(まきし)がある場合は、軸に巻きつけ、その上に巻緒を3回半ほど平行に巻きつけ、懸緒の下にくぐらせます。この時くぐらせた方を輪にしたまま反対側に差し入れ、この輪になった方と残った一本の両の先端が同じぐらいの長さになるよう揃えて完成です。

なお、緒の巻き加減は、あまりきついと表具の真ん中が縦方向に波を打って後々傷みの原因となるので注意が必要です。



あとは、箱から出したときの逆の順序で箱に戻して終了です。

余談ながら、軸を収納する桐箱には、箱と蓋を合わせたときの向きがあって、天地が逆様だと合わせ目に僅かな、指でなぞって感じるくらいの段差が生じます。これは、箱の製作時最後の仕上げに鉋をかけた結果です。合わせ目をそっとなぞり、段差を感じることがなければ、正しく蓋が被せたことになります。蓋を開けた時に向きを揃えて置けばいいようなものですが、その前の段階で取り違えていることも意外と多いのです。

また、収納の際防虫剤を入れるのであれば、種類の異なる薬剤を決して混用なさらぬように。薬剤同士が反応して溶け出し、作品や箱に染みを作ってしまいます。防虫剤を入れて、安心してしまうよりも、少なくとも年に1回は虫干しを兼ねて点検する。昔から行われて来たこの方法は、保存の上でも理に適って有効です。

取扱い方法がわかれば、あとは慣れていただくばかりです。

なお、箱の中に軸を受けるまくらがある場合、軸受け部分の広い方に八双(はっそう)(表具上端の抑え竹)が来るように納めると、軸物の出し入れが容易となります。

様々な場合が想定されますが、我が家に何やら古めかしいものが伝わって来たという事実を大切にしたいものです。

文化財・歴史的遺産の多くは、長い歴史の中でわれわれの祖先たちの愛情・努力によって大切に守られ、幸運にも恵まれて今日に伝えられたものたちです。ものの価値には様々な物差しがあることでしょうが、家に伝わったものなら、家宝です。家宝を大切に扱い、次の世代に伝えていく。これは、文化財・歴史的遺産を可能な限り健全なかたちで次代に伝えていくという博物館のしごとと、その精神において何ら変わるものではないと思います。　　(学芸担当　鈴木 邦照)

古書画の[軸物]取扱いについて

Information

平成27年度の博物館行事です。（12月まで）

展覧会・講座・教室　etc

●…一般向け事業　開催日・講　座　名
○…子ども向け事業　内　容・申込開始日

8月

7月18日（土）～　第42回企画展「妖怪ー闇にひそむ不可思議なるものー」～30日（日）

- ●16（日）資料特別解説 **妖怪資料を語るタベ**
- ●2（日）・9（日）・23（日）博物館歴史講座 **妖怪のヒミツ** 7/8
- ○5（水）夏休み子ども体験 **ミニ灯籠を作ろう** 7/7
- ○22（土）子ども博物館教室 **親子で木をつかって遊ぼう** 8/4
- ○25（火）夏休み子ども体験 **エコテープで縄文ポシェットを作ろう** 8/5

9月

12日（土）～27（日）　**平成27年新作名刀展**

- ○12（土）子ども体験教室 **布ぞうりを作ろう** 9/1
- ●20（日）野外博物館教室 **ふるさとの祭り探訪-ほろまつり-**

10月

10日（土）～　開館25周年記念特別展 **「小堀遠州と川越藩主―遠州と酒井忠勝の交流を中心に―」**

- ○3（土）子ども体験教室 **香を聞く-香道体験-** 9/2
- ○24（土）子ども体験教室 **水引で飾りを作ろう** 10/9
- ●10（土）記念講演会 **開館25周年記念特別展**
- ●11（日）・25（日）・11/8（日）博物館歴史講座 **開館25周年記念特別展関連講座** 9/3
- ●31（土）野外博物館教室 **探訪中世城郭**

11月

～15日（日）　開館25周年記念特別展 **「小堀遠州と川越藩主―遠州と酒井忠勝の交流を中心に―」**

- ●1（日）・8（日）・15（日）古文書講座 **上級編**
- ●3（火・文化の日）　民俗芸能実演 **南大塚の餅つき踊り**
- ○7（土）子ども体験教室 **和楽器体験-琴・三味線に挑戦-** 10/6
- ○21（土）子ども体験教室 **花を遊ぶ-いけ花体験-** 11/4
- ●18（水）野外博物館教室 **埼玉の土器を観る-比企郡編-**

12月

- ○12（土）子ども体験教室 **お正月飾りを作ろう** 12/2
- ○19（土）子ども体験教室 **ミニ掛け軸作り** 12/3

※変更の可能性もあります。申込方法も含め、詳細については「広報川越」またはホームページを御覧ください。
　お問い合わせは博物館まで。

平成26年度 利用状況　博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも、平成26年度中に、多くの皆様に御来館いただき、誠にありがとうございました。今後も、より多くの方に御満足いただけるよう、常設展示・企画展示の充実を図っていきたいと考えています。皆様の御来館を心よりお待ちしています。

施設区分	26年度入館者数				1日平均入館者数	開館日数
	一般	大学生高校生	中学生以下	合計		
博物館	58,347	3,458	36,400	98,205	336	292
川越城本丸御殿	104,223	5,372	27,074	136,669	457	299
川越市蔵造り資料館	49,316	3,167	25,763	78,246	259	302

開館25周年記念特別展
小堀遠州と川越藩主
―遠州と酒井忠勝の交流を中心に―

会期：10月10日(土) ～ 11月15日(日)

開館25周年という節目の年を記念し、公益財団法人 遠州茶道宗家の協力を得、小堀遠州と酒井忠勝・堀田正盛・松平信綱との茶の湯を通した交流に焦点をあてた展示をします。今回の特別展では、ほとんど展示されない小堀遠州像(京都市孤篷庵蔵)や油滴天目茶碗、添芙蓉台(京都市北村美術館蔵)等、遠州ゆかりの貴重な資料も出品します。

小堀遠州像(京都市孤篷庵蔵)

平成27年新作名刀展－現代の刀工・刀職－
会期：9月12日(土)～9月27日(日)

公益財団法人　日本美術刀剣保存協会と共催

第42回企画展
妖怪 闇にひそむ 不可思議なるもの

会期:7月18日(土)～8月30日(日)

和漢百物語
（町田市立国際版画美術館蔵）

「妖怪」というと、「怖いもの」・「おどろおどろしいもの」といったイメージがありますが、時代を経るとともにそのあり方は変わっていきました。今回の展示では、さまざまな妖怪の姿をご覧いただけるように、絵巻物・黄表紙・錦絵などを取り揃えました。なかでも、学外での展示ははじめてとされる『百鬼夜行圖』や本邦初公開の川越藩の神隠し事件を記した『神かくし中の記』などは必見です。いつもの博物館とはちょっと違った「不可思議」な世界が広がっています。

利　用　の　御　案　内

◆入館料

区　分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館（観覧）券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※(　)内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間　午前９時から午後５時まで（ただし入館は午後４時 30 分まで）
◆休　館　日　月曜日（休日の場合は翌日の火曜日）
第４金曜日（休日を除く）年末年始（12 月 29 日～１月３日）
館内消毒（６月下旬）特別整理期間（12 月下旬）

＊開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ
（館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は１月２日から開館）

◆交通案内

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅よりまたは西武新宿線　本川越駅より、
- 東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩0分
- イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分

※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

7月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

8月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

9月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

10月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

11月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

● 印は、3館休館（博物館、資料館、本丸御殿）　● 印は、1館休館（博物館）

博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のＱＲコードから登録の手続きができます。随時最新の情報等を配信します。
※ 登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。

発行日●平成27年8月7日　　発行●川越市立博物館

〒350-0053　川越市郭町2丁目30番地1　　TEL049-222-5399　FAX049-222-5396
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp　　ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/